

# 二松学舎大学人文学会第119回大会

【日 時】 2019年7月13日（土） 12：45～（開場12：20）

【会 場】 二松学舎大学九段キャンパス1号館201・202教室

---

受 付 12：20～ 1号館 2階エレベーター前  
開 会 12：45 （201教室）

---

〈研究発表〉 12：50～14：45

## 第Ⅰ会場（201教室）

「無頼派」文学における「共依存」 ——『ヴィヨンの妻』と『桜の森の満開の下』——  
博士前期課程国文学専攻 2年 宋 迪

『野分』論 —— 文学と音楽の相関性 博士後期課程国文学専攻 2年 パク・ヨンソン

「断り表現」から見た坊っちゃんの言動 東呉大学 講師 楊 意心

## 第Ⅱ会場（202教室）

朱熹の鬼神観について 博士前期課程中国学専攻 2年 櫻井 亮介

日中におけるコンテンツリズムの比較 ～映画、小説を中心に～  
博士後期課程国文学専攻 2年 江 楠

『古事談』の方法 ——『富家語』との比較を手がかりとして  
博士後期課程国文学専攻 3年 鈴木 和大

---

〈講演と報告〉 14：55～17：35（201教室）

19世紀欧州東洋学におけるレオン・ド・ロニーの位置づけ

ルーヴァン・カトリック大学 名誉教授 ウィリー・F・ヴァンドウワラ 氏

19世紀のフランス東洋学者ネットワーク ——レオン・ド・ロニーを中心に

二松学舎大学 講師 ヴィグル・マティアス

近代ヨーロッパと中国学 ——レオン・ド・ロニーの漢籍コレクションを通して——

二松学舎大学 教授 牧角 悦子

---

〈総 会〉 17：40～18：20 （201教室）

〈懇 親 会〉 18：30～20：30 （13階ラウンジ）

---

二松学舎大学人文学会事務局

〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16／03-5962-3304／jinbun@nishogakusha-u.ac.jp

## 〈研究発表〉 第Ⅰ会場

### 「無頼派」文学における「共依存」

——『ヴィヨンの妻』と『桜の森の満開の下』——

博士前期課程国文学専攻二年 宋 迪

太平洋戦争終結後の一九四六年から一九四八年までの間に、作品の特徴が極めて似ている作家たちが現れ、日本の評論界と文学界はそれを「無頼派」と称したのである。

本論は、一九四七年に発表された異なる背景、異なる結末の短編——『ヴィヨンの妻』（太宰治）と『桜の森の満開の下』（坂口安吾）を対象として取り上げ、登場人物の行動・心理状態・志向などをめぐって、作品の中で共通に表現されている「共依存」を分析する。

『ヴィヨンの妻』の大谷と妻と『桜の森の満開の下』の山賊と女は非常に似た経験を持っている。前者は夫が無責任の事実婚をする物語で、後者は旅人を殺害し、人妻を掠奪する物語である。双方とも健全な人間関係を欠いている。後の生活の中で変化を得たとは言え、自分を苦しめる根源から脱け出せたわけではない。これは自己喪失の一種であり、もう一つの個体をめぐって生きているという病的な「共依存」である。戦後の特殊な時期に、太宰治と坂口安吾がこのような人物像を創造したのは必然なのかもしれない。そのような人物は日常生活にも存在するであろうし、またこの時期の太宰治と坂口安吾に影響を与えたと考えられる。

### 『野分』論 —— 文学と音楽の相関性

博士後期課程国文学専攻二年 パク・ヨンソン

『野分』（「ホトトギス」一九〇七月）は、漱石が教師を辞め、専業作家として新しく出発する直前に書かれた小説である。当時は日露戦争後の不況による貧富の差の拡大があり、モラルの揺らぎもあった。作中には、哲学を専攻して大学を卒業した後、まだ職を得ていない作家志望の高柳と、時流に乗って要領よく生きていくことができず、三つの中学校から追い出された経験を持つ道也が登場する。高柳は友人の中野と鑑賞した音楽会で、音楽による「飛翔」体験を得て作家になる決心をする。本稿は、『野分』における文学や音楽が、人間の本来的なあり方を模索し、解き放つための媒介として描かれていることを論じる。『野分』では、芸術と資本が不可分のものとしてある社会においても、なお文学や音楽が芸術としての本質を保つことが証明されている。その指標となっているのは、作中の音楽会で演奏されるベートーヴェンやワーグナーの音楽に内在する強力な芸術的精神とその歴史的背景である。また、道也の文学的な姿勢のなかにもそれは形象化されている。さらにその道也の精神は、文学の道で生きようと決心する高柳に受け継がれていくであろう。

## 「断り表現」から見た坊っちゃんと言動

東呉大学 講師 楊 意 心

夏目漱石の『坊っちゃん』は、漱石自身の松山中学赴任時を材料とした物語だと言われている。漱石が執筆した沢山の作品の中で、最も広く知られている作品だといえるだろう。『坊っちゃん』の研究の中で、小説『坊っちゃん』の作品に関する研究論文は多くある。なかでも、坊っちゃんの性格についての研究は少なくない。

ここでは、主人公の「坊っちゃん」がほかの登場人物との間で交わした会話の中の「断り表現」から「坊っちゃん」の行動と性格に着目し、その行動と性格の意味を分析し、「坊っちゃん」がどのような人物であるのかを考察したい。そのために、「断り行動とその意味」という図式で、主人公の「坊っちゃん」がほかの登場人物へどのような配慮を向けているのかを検証する。具体的には、善意と悪意を含むどのような断り表現が使われているのか、ここでは積極的と消極的な断り表現とを分けて意味を定義する。そして善意で積極的な断り表現を「配慮の断わり」、悪意で消極的な断り表現を「不遜の断わり」、善意で消極的な断り表現を「謙虚の断わり」、悪意で消極的な断り表現を「卑屈の断わり」を分けて、坊っちゃんの性格を探っていく。

## 朱熹の鬼神観について

博士前期課程中国学専攻二年 櫻井亮介

朱熹(一一三〇―一二〇〇)の鬼神に関する言説は、いわゆる朱子学と呼ばれる学問体系の一角を担っている。

先秦以来儒教を継承してきた学者の間では宋代以前までは、孔子の「鬼神を敬して之を遠ざく。」や、「未だ人に事うる能わず。焉んぞ能く鬼に事えん。」等の言葉の影響もあつてのことか、鬼神に関する考察の記録は案外と少ない。

宋代になるとその状況は一変する。技術が進み学者の言説が後世に残りやすくなったと言う社会背景もあるだろうが、積極的に鬼神を論じた言説が散見されるようになる。それらの言説を受け調整し、経書や古典の世界と現実世界とを調和せしめようとする思想の体系を構築したのが朱熹だったのではないだろうか。

その門人である黃士毅は、朱熹の鬼神観を「朱子語類門目」で、「在天の鬼神」・「在人の鬼神」・「祭祀の鬼神」と言う三つの概念に整理している。それを受けて三浦國雄氏は「朱子鬼神論の輪郭」で、上の三つをそれぞれ「自然現象」・「魂魄」・「祖霊の祭祀」と換言している。

本発表では先ず朱熹の鬼神観に関する先行研究の内容を確認し、それに朱熹による人の死生に関する言説をも参考にし、改めて朱熹の鬼神観を考察してみたい。

## 日中におけるコンテンツツウリズムの比較

（映画、小説を中心に）

博士後期課程国文学専攻二年 江楠

「コンテンツツウリズム」という言葉が、地域に関わる映画、小説、漫画などの物語性を通じて、その地域固有のイメージを作ることだと考えられた。日本と中国において、昔から文化や物語に触発された旅行は存在した。日本には日本の名所旧跡による歌枕があり、中国には古代中国人の伝説的な地理認識を示す「山海経」がある。現代は、映画も大衆娯楽として生活の中で重要な位置を占めている。映画で登場する名場面の舞台となった場所も、観光の一環として欠かせなくなり、旅行の主要な目的地となっている。日本国内において、コンテンツツウリズムについての研究は多くなっている。しかし、日中において、コンテンツツウリズムの政策がもたらす効果の比較はまだないようである。ここでは、その政策及び効果の部分を、データの形でまとめて、分析したいと考えている。さらに、日中の現代小説と映画作品の实例をそれぞれ取り上げて、小説と映画の物語によって旅行が触発された現状をそれぞれ分析し、経済や観光の立場ではなく、メディア学と文学の立場で受容者に与えた影響を検討したいと考えている。

## 『古事談』の方法

——『富家語』との比較を手がかりとして

博士後期課程国文学専攻三年 鈴木 和 大

源顕兼が編じた『古事談』は、出典として『江談抄』や『中外抄』、『富家語』といった談話録、『扶桑略記』や『小右記』といった史書、記録を用いていたとされ、また、それらの資料にほとんど手を加えず書承していることは夙に知られる。しかし、浅見和彦氏、伊東玉美氏、田村憲治氏らが指摘するように、書承方法は一語一句違わず、というわけではなく、改変の痕跡も認められる。

そこで、本発表では、『古事談』と、その出典になったといわれる藤原忠実の談話録『富家語』を採り上げ、本文比較によって、『古事談』の説話受容の方法を探ってみたい。なお、『富家語』に対する『古事談』の方法については、先述の諸氏によって、中心となる話題を変えたり、叙述の明確化がなされている等と指摘されるが、『富家語』との共通話全てが検討されているわけではなく、いまだ検討の余地は残る。また、そうした方法が、各巻に冠せられた篇目と、どう関連しているのかについては、先行研究では触れられていない。

これらの検討を通して、各巻の意図、引いては『古事談』が目指したものは何であったかの見通しを立て、本発表を今後の『古事談』研究の架橋とする。

〈講演〉

## 19世紀欧州東洋学におけるレオン・ド・ロニーの位置づけ

ルーヴァン・カトリック大学 名誉教授 **Willy. F. Vande Walle** (ウイリー・F・ヴァンドウワラ) 氏

〈講師紹介〉

ベルギー・ゲント大学東洋学科修了。一九七二年～一九七五年、文部省奨学生として大阪外国語大学に留学。一九七六年、ゲント大学で博士号取得。一九七七年、国際交流基金特別研究員として京都大学へ留学。一九九三年、国際日本文化研究センター客員教授。長年にわたり日本芸術の展覧会の実施に協力し、特に、一九八九年のベルギー・ユーロパリア日本開催時には、学芸委員会の委員長として、ヨーロッパに日本を広めるために貢献した。二〇〇〇年、国際交流基金特別奨励賞をベルギー人としてはじめて授与される。二〇〇三年以来、日本史料専門家欧州協会会長。二〇〇六年、勲三等旭日中綬章。二〇〇九年、関西大学名誉博士号。オランダ語、英語、フランス語、及び、日本語での著書・論文等、多数あり。

編著書・論文

- \* & Noël Golvers, co-ed. *The History of the Relations Between the Low Countries and China in the Qing Era (1644-1911)*. Leuven Chinese Studies XIV. Leuven: Leuven University Press, 2003, 508 pp. 編著『清時代に於ける中国とオランダ・ベルギーの関係史』
- \* & Paul Servais, ed. *Orientalia: Études orientales et bibliothèques à Leuven et Louvain-la-Neuve. Symbolae Facultatis litterarum Lovaniensis B, vol. 20*. Louvain: Leuven University Press, 2001, 193 pp. 編著『ルーヴァン両大学に於ける東洋学研究の歴史』
- \* & Kazuhiko Kasaya, co-ed. *Dodonæus in Japan: Translation and the Scientific Mind in the Tokugawa Period*. Leuven & Kyoto: Leuven University Press & International Research Center for Japanese Studies, 2001, 383 pp. 編著『日本に於けるドドンヌスー徳川時代に於ける翻訳事業と科学精神』。
- \* 『日本通史』
- \* 『中国帝政時代の歴史：1600年まで』
- \* *Japan & Belgium: Four Centuries of Exchange* 編著『日本とベルギー—四世紀にわたる交流の歴史』. Brussels: Commissioners-General of the Belgian Government at the Universal Exposition of Aichi 2005, Japan, 2005, 423 pp.
- \* *Japan & Belgium: An Itinerary of Mutual Inspiration* 編著『日本とベルギー—相互刺激の道のり』. Tiel: Lannoo, 2016, 400 pp.

ほか多数



